

2026.05.24.

## 「そうすれば聖霊を受けます」

旧約 イザヤ書26章16～19節

新約 使徒言行録2章36～42節

### 1. はじめに

今日はペンテコステの礼拝を捧げています。ペンテコステは日本語では聖霊降臨日と言います。この日に起きた出来事は、使徒言行録の2章に記されております。2章1節に「五旬祭の日が来て」と記されておりますが、この「五旬祭」と訳されているのが原文のギリシャ語では「ペンテコステ」となっています。旬というのは10日という意味ですから、「五旬祭」とは「50日目の祭」ということになります。何から50日かと言いますとイースターから50日です。イースターは「春分の後の満月の後の最初の主の日」で、年によって3月の終わりから4月の終わりまで1ヶ月くらいの間を移動します。ですから、ペンテコステの日もそれに伴って1ヶ月くらいの間を移動することになります。今年5月ですが6月になることもあります。元々、この日はユダヤ教における「七週の祭り」と呼ばれる祭りの日でした。何から七週かと言いますと、「過越の祭」の後の最初の日曜日に「初穂の祭り」というものが行われていたのですが、この日から七週ということでした。この初穂の祭りの日にイエス様は復活されましたので、イースターの後50日がペンテコステの祭りとなりました。元々「七週の祭り」は小麦の収穫を祝うことと、シナイ山に神様が御臨在されてイスラエルの民にモーセを通して律法が授けられたことを祝う祭りの意味がありました。「過越の祭」も「七週の祭り」も、ユダヤ教における三大巡礼祭りでした。もう一つは10月頃に行われる「仮庵の祭り」です。ですから、このペンテコステの日にはユダヤに住むユダヤ人を始め、世界中に離散していたユダヤ人達もエルサレム神殿に巡礼に来ておりました。そして、五〇日目の過越の祭りの時にも多くの人々はエルサレムに巡礼に来ており、イエス様の十字架の出来事を目撃していたわけでした。

ペンテコステの祭りは、ユダヤ教においてはシナイ山に神様が降られてイスラエルの民に律法を与えられたことを記念していたわけですが、キリスト教においてはこの日に聖霊なる神様がイエス様の弟子たちの上に降るといふ出来事が起きました。過越の祭は、出エジプトの時に神様の裁きがイスラエル上を過ぎ越していったことを記念していたわけですが、イースターにおいては、イエス様の十字架と復活によって私共が神様の裁きから救われ、永遠の命への道が開かれたことを感謝します。このように、旧約における出来事と新約における出来事、またユダヤ教の祭りとキリ

スト教の祭りは、同じではありませんけれども、行われる日もその意味もかなり重なっていることがお分かりなるかと思います。それは、旧約はイエス様によってもたらされる新約に救いを預言し、新約は旧約が預言し指し示していた救いが成就したことを記しているからです。

## 2. キリスト教の三大祭り

今日のペンテコステは、キリスト教の三大祭りであるクリスマス・イースターと並ぶ大切な祭りなのですが、ちょっと影が薄いというところがあるかと思います。クリスマスは誰でも知っています。お寺の幼稚園でもクリスマス会は行われています。もっとも、イエス様の誕生日というよりも、サンタクロースが来る日と思われているようですけれど、それでもクリスマスを知らない人はいないでしょう。町中にクリスマスの飾りが溢れます。イースターはクリスマスに比べますと、かなり認知度は下がります。キリスト教の幼稚園や学校に関わった人や教会に来ている人しか知らないかもしれません。東京のディズニーランドでは、イースターを春の祭りとして宣伝するようになりましたが、これはちょっとどうかと思います。でも、イエス様が復活されたということは、信仰が無い人には「何のことか分からない」ということなのでしょう。それに、日にちが決まっていないということも、認知度が上がらない理由かもしれません。更にペンテコステとなりますと、この日本では何のことやらさっぱり分からない、聞いたことも無いという人も多いでしょう。キリストの教会ではこの三つの祭りを、わかりやすく受け止めることが出来るようにと、それぞれを〇〇の誕生日と言う言い方をしてきました。クリスマスは「イエス様の誕生日」、これは分かりやすいですね。お釈迦様の誕生日も「花祭り」として祝っているのです、日本人にもピンとききます。ではイースターはどうなるかと言いますと「キリスト教の誕生日」です。確かに、イエス様が御復活されなければキリスト教は成立しなかったでしょうから、そのように言われるわけです。そしてペンテコステですが、これは「教会の誕生日」となります。

## 3. ペンテコステにおいて何が起きたか？

さて、ペンテコステの日に何が起きたのか、聖書が告げていることに聞いていきたいと思えます。イエス様が十字架にお架かりになって死んで、三日目に復活されました。そして、復活されたイエス様は四〇日間にわたってその御姿を弟子たちに現されました。そして、40日後にイエス様は天に上って行かれました。それから10日間、弟子たちは集まり、祈って聖霊が降るのを待っておりました。聖霊が降ることをイエス様が告げていたからです。聖霊というのは、父なる神様の霊であり、イエス様の霊です。ですから、この聖霊の聖は聖なる神様の聖で、米へんに青いと書く精ではありません。聖なる神様の霊である聖霊と、森の精霊とは全く違います。言葉の

音が同じなのでややこしいですが、ペンテコステの時に弟子たちに降った霊は、聖なる神様である霊、天と地を造られた神様の霊、イエス様の霊です。復活されたイエス様は天に上られてしまったわけですから、弟子たちはもうイエス様を見たり、触ったり、イエス様の声を直接聞くことは出来なくなりました。これから自分たちは、何をどのようにしていけば良いのか、直接指導し、導いてくれる人がいなくなってしまったわけです。しかし、そのような弟子たちにイエス様は天から御自身の霊である聖霊を降し、この聖霊なる神様の導きの中で歩むようにして下さったわけです。そして最初に聖霊なる神様が弟子たちに降った日がペンテコステの日でした。その日に起きた出来事が使徒言行録2章に記されています。順に見ていきましょう。

#### 4. 聖霊が降った

2章2.3節「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。2:3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」ここを読みますと、実際に何が起きたのか良く分からないという人もいるでしょう。特に「炎のような舌」というのがどんなものなのか、私のような想像力が貧しい者にはとても映像化することが出来ません。しかし、ここで聖書が告げていることははっきりしています。それは「弟子たち一人一人の上に聖霊が降った」ということです。「激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ」とありますが、風が吹いてきたわけではありません。あくまで「ような」です。しかし、この「激しい風が吹く」と言われていることが大切です。何故なら、この「風」という言葉は、旧約以来「霊」とか「息」という意味があり、聖霊を指しているからです。私共は風を見ることは出来ませんが、風を起すことも出来ませんが、風によって引き起こされる出来事、木々が揺れたり、砂埃が舞ったり、風を頬に受けたりすることによって風が吹いていることを知ります。ここでは、聖霊が降ったことが「音」として認知されたということです。旧約でも神様がシナイ山に降られたとき何が起きたと記されているか見てみますと、出エジプト記19章16節には「雷鳴と稲妻と厚い雲が山（シナイ山）に臨み、角笛の音が鋭く鳴り響いたので、宿営にいた民は皆、震えた。」とあります。雷鳴・稲妻・角笛の音と表現されています。「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。」というのは、まさに聖霊なる神様が弟子たちのいた家に降られたということを告げているわけです。そして「炎のような舌が分かれ分かれに現れ」ですが、具体的な形を思い描こうとすると難しいのですが、この「炎」も「舌」も聖霊なる神様を表現しています。この炎というのは、罪を焼き尽くす炎です。そして、舌というのは聖霊なる神様によって弟子たちが語り始めることを示しています。聖霊は言葉によって人間の罪を明らかにし、その罪を焼き滅ぼし、清め、新しい命を与えるお方だということです。

## 5. 様々な言葉で語った：世界中の人々に告げる

2章の4節では「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。」イエス様の弟子たちが、その日様々な国や地方からエルサレムに来ていたユダヤ人達に、それぞれの国の言葉で語り出したということが記されています。9節10節には、その時弟子たちが語った言葉の国や地方が記されています。これだけを見ますとまことに不思議なことのようと思われるでしょうけれど、この日に起きたことは、実にその後2千年間にわたってキリストの教会において起き続けています。ペンテコステの日に起きたことは、その後聖霊なる神様によって為され続けることが出来事が示されたと言って良いでしょう。

私共は今、宮崎の地で日本語で礼拝をしています。しかし、今朝、世界中でどれだけの言語で礼拝が捧げられているのでしょうか？それは聖書が何言語に翻訳されているかによって、類推することが出来ます。現在地球上には81億人の人がおりますが、まだ19億人の人達が話す6千6百の言語にはまだ聖書全巻は翻訳されていません。しかし、既に776言語には聖書全巻が翻訳され62億人の人達が自分の話す言葉で聖書全巻が読めています。そして、新約聖書だけとか聖書の一部分だけ訳されているのは訳4000言語に及んでいます。これだけの言語に翻訳されている聖書は、主の日の礼拝において用いられていると考えて良いでしょう。これは生涯をかけて聖書を翻訳する営みに捧げている人がいるということですが、この出来事は聖霊なる神様の御業が今も続いているということを示していると理解して良いでしょう。実に驚くべきことです。

## 6. イエス様がキリストであると語った：伝道した

では、ペンテコステの日から弟子たちは何を語り始めたのでしょうか。2章14節以下に、ペトロによるキリスト教会最初の説教が記されております。語られていることは以下の四点です。

- ①ナザレ人イエスこそ神様から遣わされたメシア、キリストである。
- ②イエス様は十字架かけられて死んだけれど、復活された。
- ③悔い改めて、イエス・キリストの名によって洗礼を受けなさい。
- ④そうすれば、聖霊を受けます。

このペトロが最初に告げたことは、2千年の間キリストの教会において語られ続けてきたことです。キリストの教会は、このことを語り続けてきました。これが、聖霊なる神様の導きの中で為され続けたことです。聖霊は全ての者を救おうとされる神様の御心を実現するために、ペンテコステの日以来人々に働きかけ、キリストの教会を導き、出来事を起こし続けておられます。この聖霊なる神様によって為し続けられているのが伝道です。ペンテコステの日以来、聖霊なる神様は伝道をし続

けておられます。伝道しない教会はありません。それは泳がない魚、飛ばない鳥、三角の丸、と同じように形容矛盾です。聖霊を受けて、聖霊によって建てられたキリストの教会は、伝道するものです。伝道の仕方は時代によって変わるでしょう。しかし、伝える内容は変わりませんし、全てのキリスト者は聖霊を受けて信仰が与えられ、洗礼を受けたのですから、全てのキリスト者が伝道に遣わされ、用いられます。どうすれば？何を語れば？自分に出来るか？そんなことは、何も悩むことはありません。聖霊なる神様が道を開き、全てを備えてくださるからです。それに、神様は出来ないことをやりなさいとは言われませんし、神様がやりなさいという以上、出来るように全てを備え、整えてくださるからです。

## 7. 洗礼を授けた

この日ペトロの説教を聞いて悔い改め、洗礼を受けた者は3千人であったと聖書は告げます。これはすごい数字ですが、2千年間聖霊なる神様によって為され続け、現在も為され続けている業はこんなものではありません。現在、統計上は世界中に26億人のキリスト者がいるとされています。これだけのキリスト者が生まれるためには、毎日何人が洗礼を受け続けなければならないか。洗礼を受けた人が50年生きるとして計算しますと、26億人÷50年間÷365日で約14万人となります。毎日14万人、一週間で98万人です。これだけの人が洗礼を受け続けているということです。そうでなければ26億人にはなりません。聖霊なる神様の御業というものは、私共の想像を遙かに超えています。私共はこの方によって導かれて生きているのですから、何も心配することはありません。

## 8. キリストの教会が誕生した

その結果、何が起きたのでしょうか？キリストの教会が誕生しました。では、その世界で最初のキリストの教会においては何が為されていたのでしょうか？42節には「**彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。**」と記されております。

「**使徒の教え**」というのは、福音書などでイエス様が弟子たちに、また人々に告げられたことでしょう。まだ福音書はありませんでしたけれど、使徒達の耳にはイエス様がお語りになったことが、しっかり頭と心に残っていたことでしょう。そしてそれを、使徒達は毎日語り続けていたに違いありません。そして、人々は主を誉め讃え続けてきました。

そして「**相互の交わり**」です。これは、信仰によって結ばれたキリスト者同士の美しい交わりがそこに生まれたということです。互いに愛し合い、信頼し合い、仕え合い、支え合う交わりです。神様を愛し、信頼し、お従いする者同士の間にも生まれる交わり。それはいつの時代であっても、麗

しいものであり、この世界の人々に神様・イエス様の素晴らしさを証します。今日、この礼拝後、愛餐会を行います。ペンテコステを覚えて、交わりの時を持つことは相応しいことです。聖霊なる神様が私共のただ中におられることを証することになるからです。

次に「**パンを割くこと**」。これは聖餐のことです。キリストの教会は生まれたときから洗礼を受け、聖餐を守っていました。イエス様がそのようにしなさいと弟子たちに命じられたからです。洗礼はその人にとって1回しかありませんけれど、聖餐は繰り返し繰り返しこれに与ります。そして、イエス様と一つに結び合わされていること、神様の子とされていること、永遠の命に与っていることを心に刻んできました。ここに私共の命があります。

最後に「**祈ること**」です。キリスト者は、キリストの教会は祈ります。祈らないキリスト者も、祈らないキリストの教会もありません。天地を造られた神様に向かって「父よ」と呼ぶことが出来る者にいただいた私共です。神様に向かって「父よ」と呼び、心一つにして互いに祈り合い、執り成しの祈りを捧げ、祈りにおいて一つに結び合わされた群れとして、キリストの教会は誕生しました。キリスト者は、気が合うとか、損得勘定とか、趣味が同じだとか、主義主張が同じだとか、年齢や性別が同じであるという所において、交わりが形成されていくわけではありません。勿論、そのような要素が全て排除されるわけではありません。しかし、そのような交わりならば、聖霊なる神様が働かれなくても出来るでしょう。しかし私共は、そのような目に見えるところにおいて何一つ同じ事が無くても、互いに祈り合うことが出来ますし、そこにおいて一つになることが出来ます。そして、祈りの中で互いに支え合います。そのような交わりの中に生きることが許されていることを、私は本当にありがたいことだと思います。

お祈りいたしましょう。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は、私共にイエス様を与えてくださり、その尊い血しおをもって私どもを救い、あなた様の子としてくださいました。そして聖霊を注いで信仰を与えてくださり、洗礼を受け、聖餐に与り、御国に向かっての歩む者としてくださいました。そして、イエス様の御体である教会に連なる者としていただき、その交わりの中に生きる者としてくださいました。まことにありがたく、感謝いたします。聖霊なる神様は、私共に働きかけてくださり、神様の御心に適う者としての歩みを導き、整えてくださいます。どうか、私共の御国への歩みを祝福し、健やかな歩みとしてください。あなた様の救いの御業がいよいよ前進していきますように。私共をあなた様の御業のために、存分に用いてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン